

2 清掃資機材の特徴と主な用途

名称	特徴と主な用途	関連知識
<p>タオル</p> 	<p>水拭き・から拭きなど清掃に欠かせない。八つ折りにして使うことが多い。タオルを使う利点は、①多くの面を使える②洗いやすい③乾きやすい。汚れた面で拭くときれいな所まで汚してしまうため、折り返してきれいな面を使うようにする。トイレと洗面台など使用する部位により色分けする。</p>	<p>使用後は、よく洗い、広げて乾燥させる。乾いたら、一枚ずつたんで重ねて保管する。</p>
<p>バケツ</p> 	<p>タオルやモップをすすぐ時や、洗剤の希釈液を作る時などに使われ、その用途が広い。容量は10～15リットルが一般的。</p>	<p>使用後は、よく洗い、水分を取り除いて保管する。</p>
<p>自在ぼうき</p> 	<p>4～5 cmの長さの毛を植えたぼうきで、毛を植えた部分と柄との接合部が自由に動くようになっている。室内清掃で多用されている。屋外用には不向きで、屋内でも凹凸の多いところには不向きである。毛先幅30 cmのものは主に階段用に、45 cmのものはフロア用に使われている。</p>	<p>綿ぼこりなどがつきやすいので、毛がきでこまめに掃除することが必要。保管する場合は、つり下げておくか、毛先を上に向けておく。</p>
<p>ちり取り</p>  <p>左から順に、片手ちり取り、三つ手ちり取り、文化ちり取り</p>	<p>片手ちり取りは、ぼうきで掃きながら片手でごみ処理するのに便利である。三つ手ちり取りは、建物内外のちり取りとして広く利用されている。文化ちり取りは、室内用として使われるほか、ごみがこぼれないので、拾い掃き用としても使われている。</p>	<p>使用後は、流水で洗い、水分を取り除いて保管する。</p>
<p>毛がき</p> 	<p>自在ぼうきなどの毛先からみついた綿ぼこりや糸くずを取り除くのに使われる。毛がきの代用として、ワイヤーブラシや粗めのくしを用いる場合もある。</p>	<p>使用後は、ほこりなどを取り除き、つり下げるか、目につきやすい場所に保管する。</p>

<p>スクイジー</p> 	<p>窓ガラスの清掃に使用する。ガラス面をタオルなどで適当にぬらし、水を一気に引く。ゴム幅が通常30～50cmまでの数種類があり、作業箇所に応じて使用されている。ゴム刃が劣化したら、ゴム刃だけ交換できる。</p>	<p>使用後は、流水で洗い、水を取り除き、ゴム刃を上にして保管する。</p>
<p>乾式モップ (プレーンモップ)</p> 	<p>乾いたモップで、床などのほこりを拭き取るのに用いる。楕円形の頭部が平らなのでプレーンモップと呼ばれ、体育館などの広い場所の除塵ができる。ぬれた床、湿っている床の清掃には適さない。</p>	<p>使用後は、ほこりを払い落とし保管する。汚れたら洗濯し、よく乾いた房糸に不乾性の鉱油を噴霧し、一晩置いてから使用する。</p>
<p>乾式モップ (ダストクロスモップ)</p> 	<p>不織布などを用いて、繊維間にほこりを付着させて除去する仕組みである。ぬれた床や砂などの多い床の清掃には適さない。最近は使い捨てでなく、コスト・ゴミ削減などから布製で洗って利用できるものもある。</p>	<p>ダストクロスについたほこりを、手でなでるように落としたり、掃除機で吸い取ったりして再利用する。ヘッドのスポンジ面を上にして保管する。</p>
<p>モップ</p> 	<p>床の拭き掃除や洗剤・ワックスの塗布に用いる。</p>	<p>使用後はよく洗い、つるすか、ラークを上にして乾燥させる。洗った後、糸が交差しないように手ぐしする。</p>

※県検定の資機材は、本書16ページをご覧ください。